

構造化される難民の定住化と母語教室への 参加の意味 ーフランスの旧インドシナ難民の場合ー

2012年6月10日(土)

Minako SUZUKI (minakoszk@gmail.com)

報告の概要

- ▶ フランスの難民・庇護政策と旧インドシナ難民の受入れの例外性
- ▶ 制度化、地方分散化、地域レベルの定住
- ▶ 単純化された表象と母語教室への参加を通じたアイデンティティの多様化

- ◆ 1970年代以降のインドシナ難民現象において、国際支援の場では、国連難民高等弁務官事務所(以下、UNHCR)が定める3つの恒久的解決の一つである第三国定住が積極的に選択された。難民問題の恒久的解決とは、市民権の制度を通じて、国民国家と難民の間の保護という繋がりを再び確立すること。「定住」とは、UNHCRと第三国によって予め審査、選択された難民が、定住権を付与された後に移動し、第三国の法制度に帰属することである。つまり、その移動のプロセスには、国際機関や第三国の政策による関与が色濃く反映されている。本研究では、これら難民の移動と再定住のプロセスに着目し、国民国家システムから排除されることで逆説的にもその移動が幾つもの政策に拘束されるという外的要因と、彼/彼女らの人生(life)の相互関係を考察する。

フランスにおける旧インドシナ難民の研究の意義

- ▶ フランス共和国は、個人と国家の直接的な関係を軸とした国家統合モデルを堅持しており、そこにおいて個人のエスニックな差異や人種などのいかなる属性も無化されてきた。しかしながら、旧インドシナ難民の受入れ過程を歴史的に紐解いていくと、19世紀のフランスにおいて、文化的類似性を尺度とした「同化」の是非が議論され(Saada 2007)、また、第一次世界大戦では、フランス植民地の現地人(Main d'Oeuvre Indigène)を戦争に動員する際、人種的カテゴリーに沿った戦略を立てていた(Tran 1964)。戦後、一貫してタブー視されてきた「人種(race)」は、フランスの国民国家形成過程で政策的に用いられてきた。近年のフランスのポストコロニアル視角を用いた研究でも、植民地において「市民」と「国籍」の区別が法的権利付与の差別化を意図したものであった点、「市民性」概念を用いることで、「生粋の」フランス人以外の人々を排除してきたことが指摘されている(Nicolas et al. 2003, Saada 2007)。また、近年では、フランス社会の「人種(race)」や「人種主義(racisme)」について指摘する論者も見られ、共和主義が理念や政策の原則には成り得ても、現実を体現するものではないことが明らかになっている(Fassin D. et Fassin Eric, ed. 2006)。旧インドシナ難民の研究を通じて、ポストコロニアルな現象を明らかにし、フランスの移民難民の統合の課題に関する新たな視点を提示する。

研究目的

- ✓ 難民の再定住過程を相対化するための難民と強制移動の研究
- ✓ 旧インドシナ難民の受入れと定住化におけるフランスの共和主義、普遍主義、人種主義の作用と実態
- ✓ 難民のアソシエーション活動の分析を通じた難民の統合の特徴に関する考察

方法論

- ▶ 資料収集、第一次資料(主要の新聞記事、行政刊行資料、アソシエーション発行資料、聞き取り調査による資料)
- ▶ 聞き取り調査
- ▶ 調査対象者: 在仏「東南アジア系難民(les réfugiés de l'Asie du Sud-Est)」
- ▶ 対象地域: パリ13区, マルヌ・ラ・ヴァレ (Noisiel, Lognes, Bussy-Saint-Georges)、リモージュ
- ▶ 分析枠組み
難民, 統合, 再定住, ポスト・コロニアリズム, レイシズム, アイデンティティ、エコノミー・モラル、ヴィンティジ

▶ ●調査の概要

- ▶ 調査対象者：難民支援のアソシエーションの関係者、母語教室関係者、自治体関係者、難民1世、1.5世、2世カンボジア(32)、ベトナム(3) ラオス(1)
- ▶ 調査方法は、半構造インタビューで、1人1時間から8時間、平均2時間弱。場所：学校やカフェ、調査協力者の職場や自宅。許可が得られた場合、ヒアリングを録音している。
- ▶ サンプルングの方法：母語教室で紹介を依頼したり、お正月やパーティのイベントの場に出掛けてゆき、そこで協力を依頼したり、大学のカンボジア語学科で依頼する、といったようにかなり地道な方法で協力者を募っている。また、随時、パゴダ(仏教寺院)や各種イベントの場に出向き、情報を収集したり観察をしたりしている。
- ▶ 資料：各種論文、新聞記事、アソシエーションの機関誌、自治体の機関誌、OFPRA, Insee統計資料、TeO
- ▶ 調査報告書等、行政資料

分析枠組み

▶ 難民移動の理論化

ヴィンティジ: もともととは、特定の年の優良ぶどう酒を指す言葉であるが、難民の移動においては、「(特定の年度の)型」を表わすのに用いられている。難民移動における「ヴィンティジ」とは、本質的に出発時期が同じであるために、しばしば共通の考え方、態度を持った人々であり、脱出前後の経験を共有することで互いに結びついた一団の人々を指す。

ヴィンティジーウェイブモデル

「ウェイブ」は、来仏時期の集団間の類似性を示す。

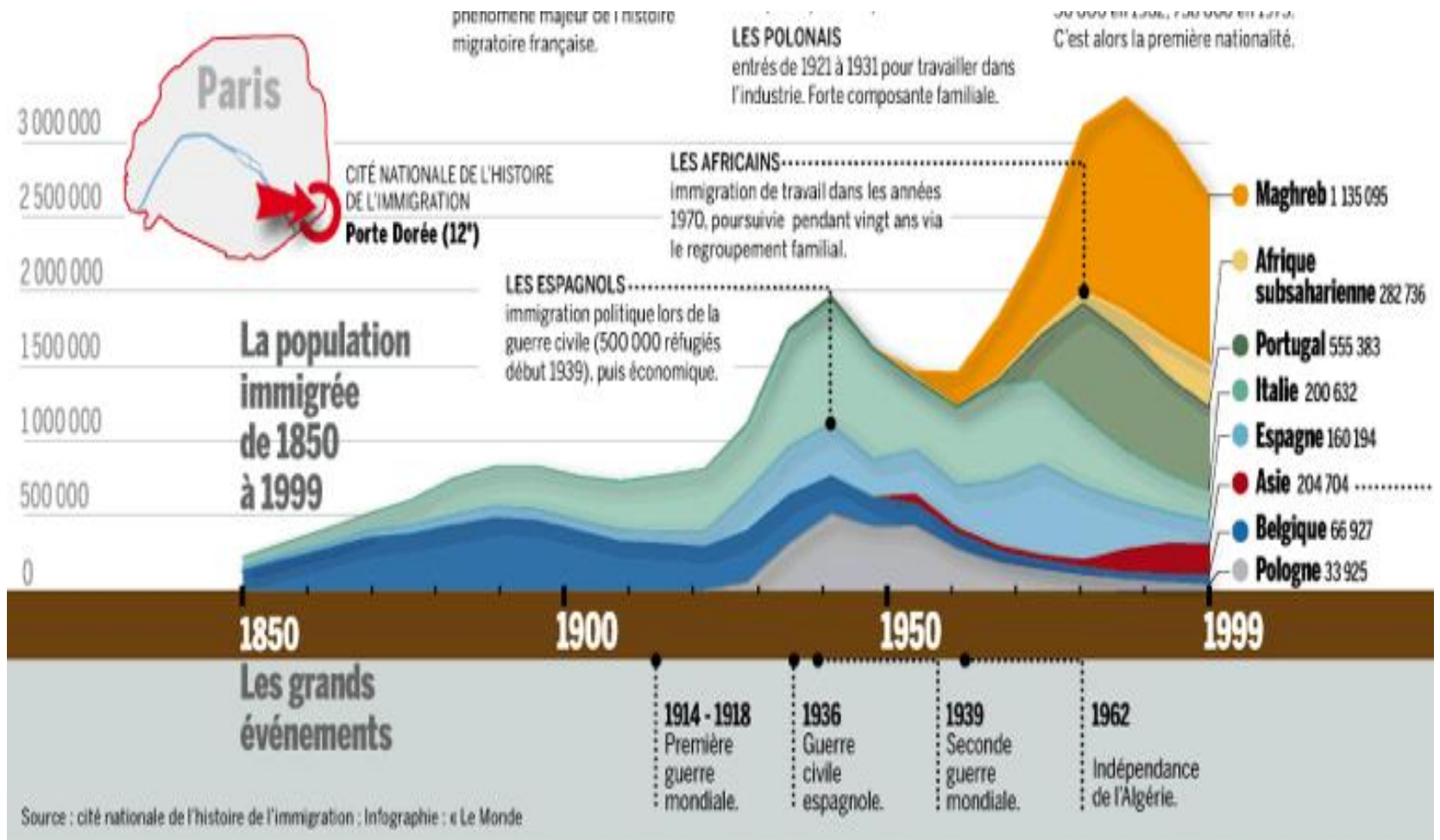
▶ 難民の再定住に関する理論

クールマンは、「難民統合の包括的モデル(A Comprehensive Model of Refugee Integration)」を提示

バルトネンは、難民を定住における中心的主体とみなし、彼/彼女ら自身の優先性と目的が、社会への参加の型に影響を与えると考えた。難民は、保持しているそれぞれの「関係」によって構成される「生活世界」を形成し、さらにその「生活世界」が反省的に統合に影響を及ぼす。

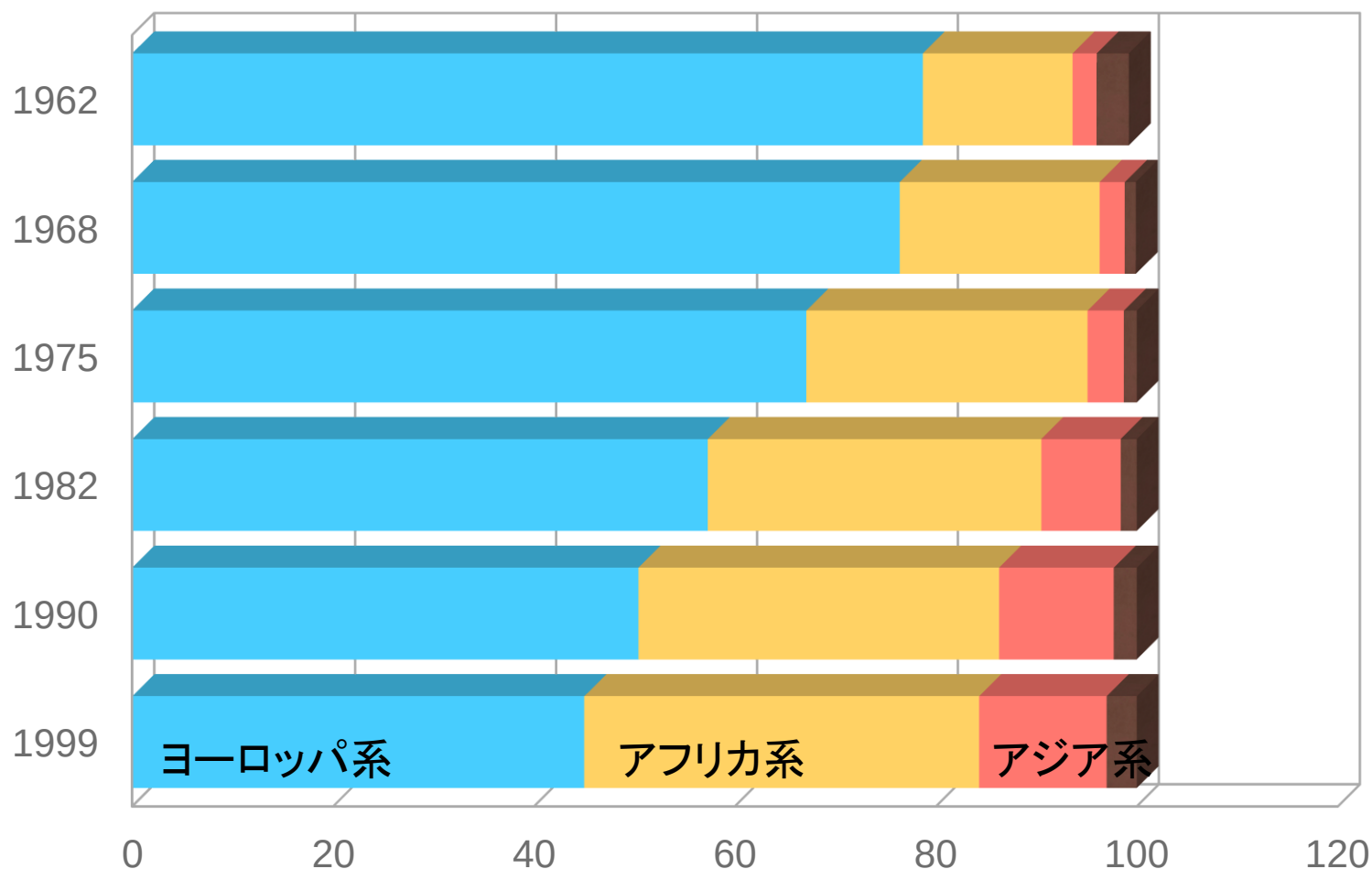
-
- ①難民の特徴(主観的な幸福感、生活の質＝目的)
 - ②脱出に関する要因(ヴィンティジ、難民経験)
 - ③受入国に関する要因(諸制度、規範、支援体制等)
 - ④難民に関する政策(国家、国際機関、自治体、市区町村)
 - ⑤受入れ国における居住(エスニック・コミュニティ、ネットワーク)

フランスにおける移民人口の推移



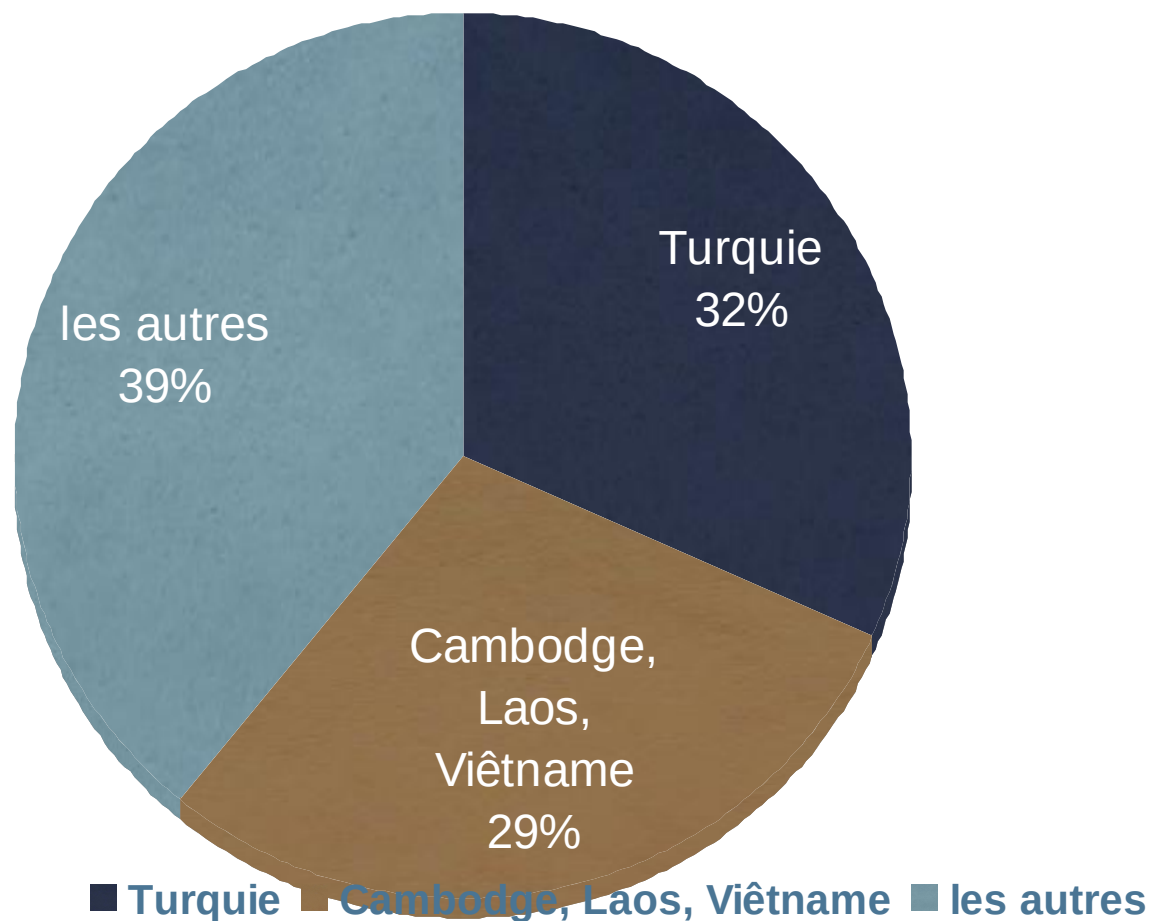
出所 : Cite National d'Histoire et d'Immigration

1962年～1999年の地域別割合の推移



Source: INSEE: 1962; 1968; 1975; 1982; 1990; 1999

1999年のアジア系人口における出身国別割合



1990年のイル・ド・フランスの（元） 東南アジア出身者の国籍別統計

現在あるいは以前の国籍	カンボジア	ベトナム	ラオス	中国と台湾	アジア系
外国籍 人数 %	26 353 40.9	16 387 25.5	10 110 15.7	11 511 17.9	64 361 100.0
帰化 人数 %	13 068 29.6	20 261 45.9	8 177 18.5	2 644 6.0	44 150 100.0
合計 人数 %	39 421 36.3	36 648 33.8	18 287 16.9	14 155 13.0	108 511 100.0

1990年の（元）東南アジア出身者のフランス全土とその Ile-de-France居住者の割合

現在あるいは以前の 国籍	カンボ ジア	ベトナム	ラオス	中国と台 湾	アジア系
外国籍 フランス Ile-de-France/France	47 369 55.6%	33 743 48.6%	31 803 31.8%	14 051 81.9%	126 966 50.7%
帰化 フランス Ile-de-France/France	19 296 67.7%	38 435 52.7%	17 758 46.0%	4 004 66.0%	79 493 55.5%
合計 フランス Ile-de-France/France	66 665 59.1%	72 178 50.8%	49 561 36.9%	18 055 78.4%	206 459 52.6%

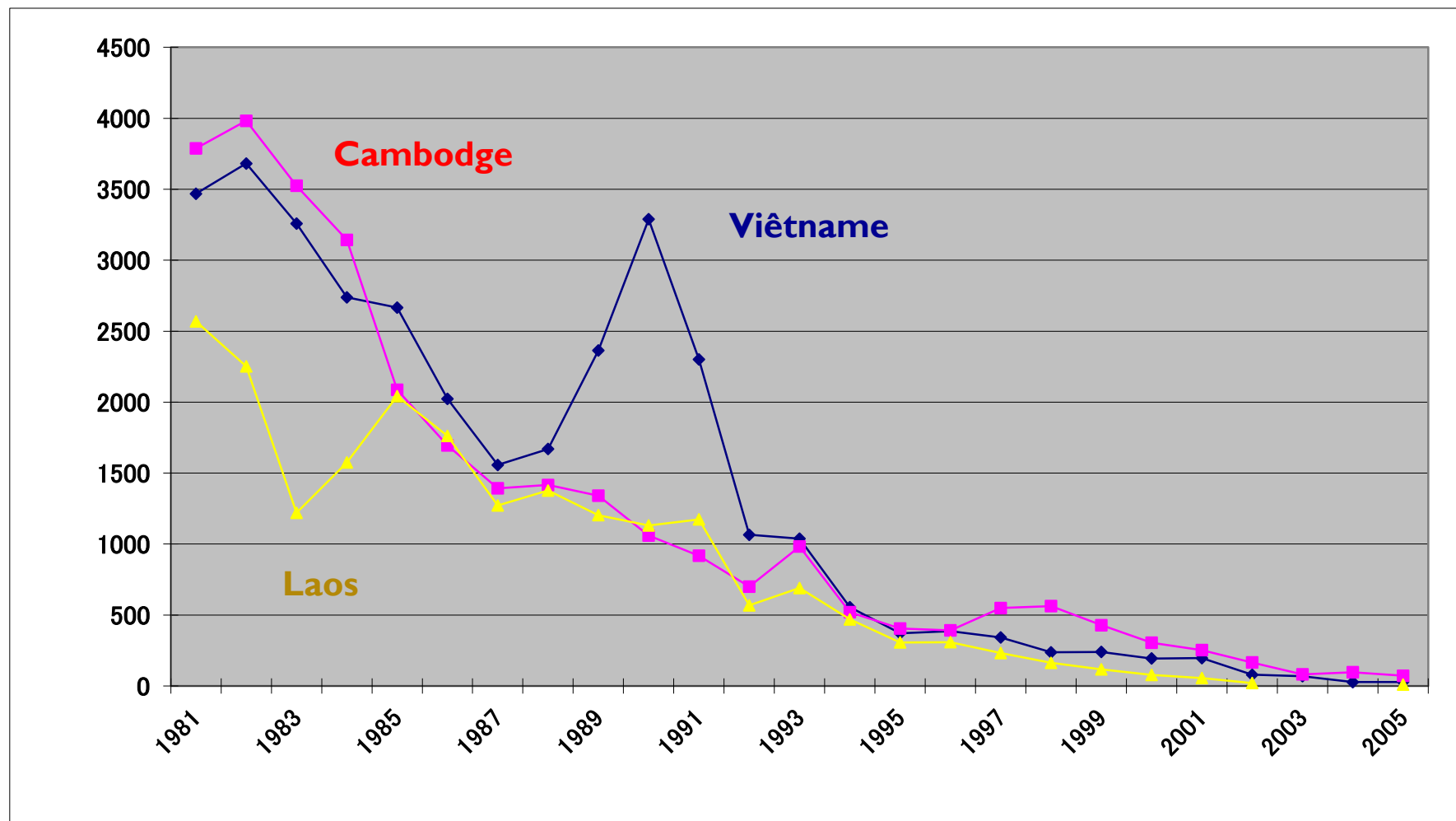
出所: INSEE, 1990年統計

出身国別、国籍者数、帰化者数の推移

	外国人		帰化によるフランス人		合計	
国籍	1990年	1999年	1990年	1999年	1990年	1999年
カンボジア 帰化率	47 369	25 969	19 296	37 315	66 665 (29%)	63 284 (59%)
ラオス 帰化率	31 803	16 240	17 758	28 992	49 561 (36%)	45 232 (64%)
ベトナム 帰化率	33 743	21 162	38 435	63 934	72 178 (53%)	85 096 (75%)
合計 帰化率	112 915	63 371	75 489	130 241	188 404 (40%)	193 612 (67%)

出所: INSEE, 国勢調査, 1990年, 1999年

東南アジア系難民の難民認定数の推移 1981年-2005年



Resource: OFPRA



I

フランスの難民・庇護政策と旧インドシナ難民 の受入れの例外性

フランスの難民・庇護政策

✓ 1952年 OFPRAの設立 (1952年7月25日法52-893「フランス難民及び無国籍者保護局の設置に関する法律」)

1954年 難民の地位に関する条約 (難民条約) の批准、施行

1971年 難民議定書の批准、施行

✓ CNR

✓ 「難民 (réfugié)」と「庇護申請者 (demandeur d'asile)」の差異化

the official notice of 23rd February 1972, the law of 3rd July 1974,

→ 「難民の安定した政治的地位」 / 「庇護申請者の不確かな地位」
(Weil, 1998)

→ 「旧インドシナからの難民」 / 「アフリカ大陸からの難民」

旧インドシナ難民の存在が、抑圧的な体制を逃れてきた政治難民とみなされ、過酷な脱出を経た苦悩しているマイノリティと解釈されていた点
(Roquejoffre 2009: 114)。

難民政策のターニングポイントとしての1991年

1990s-

- ◆ 庇護申請者の急増
- ◆ 難民・庇護政策のヨーロッパ化



☑ 庇護申請者の就労の禁止(1991年10月1日法)

☑ 難民のための一時滞在センターC.P.H. (Centre Provisoire d'Hébergement pour Réfugiés)

庇護申請者のための受入れセンターCADA (Centre d'accueil de demandeurs d'asile en France)

☑ 「領土的保護」の新設(1998年5月11日法)

☑ 「領土的保護」を「補完的保護」に移行(2003年12月10日法)

法的状況における例外性

- ▶ 1985年5月17日通達では、フランスの難民の滞在許可に関する規定を定めたものだが、東南アジア系難民は滞在許可取得の際に例外的規定が設けられていた
- ▶ 1991年の法改正において、庇護申請者の就労権が消滅したが、東南アジア系難民に対しては、例外的に認められた
- ▶ 難民の地位の認定率の高さ

世論における主要な言説

著名人、知識人、政治家....
メディア...

- ▶ 先進国間での責任の分担
- ▶ 元宗主国としての責任
- ▶ 難民の受け入れに対する無関心な態度のスティグマ化



「元宗主国としての受入れ」
「温かくホスピタリティに溢れた受入れ」

(Lacroze, 1994)

Ex. Jean-Paul Sartre, Raymond Aron, André Glucksmann が、1979年1月に「ベトナム人のためのボート」による救助作戦を開始

当時のパリ市長のジャック・シラクが難民受入れ委員会を組織
エコノミー・モラルとしての旧インドシナ難民の受入れ

Ⅱ 制度化、地方分散化、地域レベルの定住化

アソシエーションによる再定住過程の組織化

- ▶ 1975年5月25日社会行動指令の通達25 (circulaire n° 25 de la Direction de l'Action Sociale du 25 mai 1975)が出され、「インドシナ難民」の受入れ体制が整備された。

→ 国家的受入れ措置が、公共権力と主要な関連のあるアソシエーションとの協同により設置される。

受入れ過程の組織化

Association	Activities
La Croix-Rouge française (1864)	空港で難民を受入れ、トランジットセンターに同行する。
France Terre d'Asile (1971)	トランジットセンター、仮滞在センタ(C.P.H.)、 集合住居の運営管理
La Cimade (1939)	フランス語教室の運営
Le Secours Catholique (1946)	フランスにすでに親族が居住する難民の支援
Le SSAE (1924)	フランスにすでに親族が居住する難民の支援

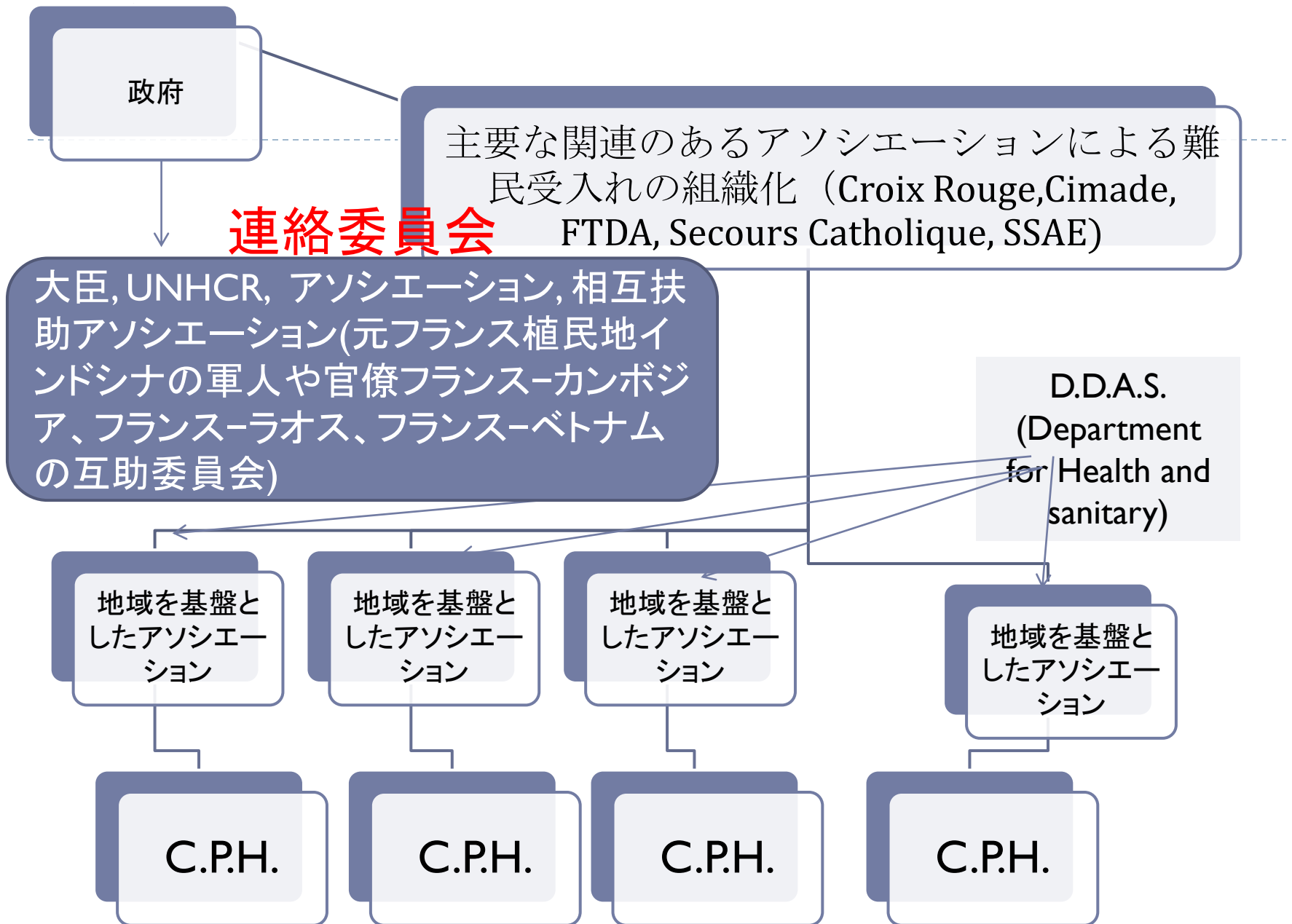
▶ 社会行動指令の1975年7月31日の通達38AS(Circulaire 38 AS du 31 juillet 1975 de la Direction de l'Action Sociale)

地方公共サービスの難民の社会的編入に対する取り組みにおいて、地方を基盤とするアソシエーションなどが委任を受けて実施する仕組みを設けた。一時滞在施設(CPH)は衛生と社会的行動の県局(la Direction Départementale de l'Action Sanitaire et Sociale、以下D.D.A.S)の監督のもと、社会行動基金の財政支援を受けたアソシエーションが運営を担うことになった。

(例)リモージュでは、1959年に3つの企業によって北アフリカ出身の労働者の支援を目的としたアソシエーションG.A.T.A.N. (Groupement d'Aide aux Travailleurs d'Afrique du Nord)が立ち上がった。1970年代の東南アジア系難民の受入れの際、このアソシエーションがCPHの運営と社会的統合の任務を負うこととなる。DDASからの財政支援のもと、実際の運営を担う。その後GATREM (Groupe d'Aide au Travail, au Reclassement, à l'Education et à la Migration)となって、現在では庇護申請者のためのCADAの運営を請け負っている。

地方分散化と地域への定住化に関する諸措置

- ▶ 連絡委員会 (Comité de liaison) の設置: (UNHCRと社会行動省の代表を中心メンバーとし)
- ▶ クォータ制は、ゲッターやエスニック・コミュニティの形成を回避する必要性
- ▶ 政府は、公共サービスとして、地域を基盤とするアソシエーションが難民の社会的統合を請け負うシステムを設ける (Circulaire 38 AS du 31 juillet 1975 de la Direction de l'Action Sociale)



地方分散化の下での地域への定住化

- ▶ 1975年5月から1980年2月の間に、39910人の難民が、71の県に広がる136施設に滞在した CPHでは、6ヶ月の滞在期間に、住居、食事、フランス語、治療、行政手続の補佐などの支援を受ける。
- ▶ 東南アジア系難民の定住化を全国的な規模にするに至った。彼/彼女らは、CPH退所後、フランスの約70県と海外県であるギアナ(Guyane)に定住していったため、フランス全土にコミュニティが存在する。その定住地域は、Ile-de-France, Lyon, Marseille, Toulouse, Renne, Lille, Limogeなどの広域に及んでいる。

地方分権政策と県の独立性の確保

▶ 1982年3月「市町村、県および州の権利と自由に関する1982年3月2日の法律」(以下、「ドフェール法」)

- ・国の地方自治体に対する監督権が軽減されたと同時に、県・地域圏に執行権が与えられた

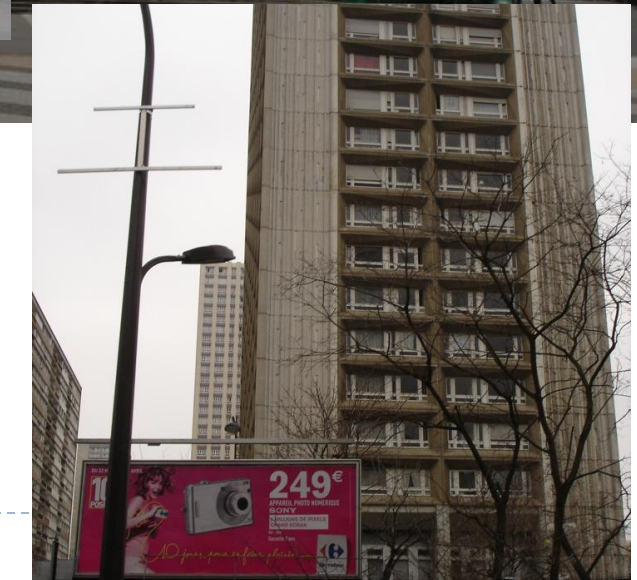
- ・革命に起源を持つフランスの県(département)は、共和主義、中央集権主義、平等主義の産物であり、内務省の地方機関という位置づけに過ぎなかった(長谷川 2002:106)。しかし、ミッテランの分権改革により、県知事の権限は新たに県会(conseil général)の長(président)に委譲され、県は独立した地方公共団体となった

- ・フランスにおける地方自治体間の権限配分の基本原則である「市町村には都市計画と近隣行政、県には社会福祉と平衡化、州には経済開発と地域整備」は、県と州に帰属する分野に関する政策の自律性を高めることとなった

難民受入れ政策のローカル化

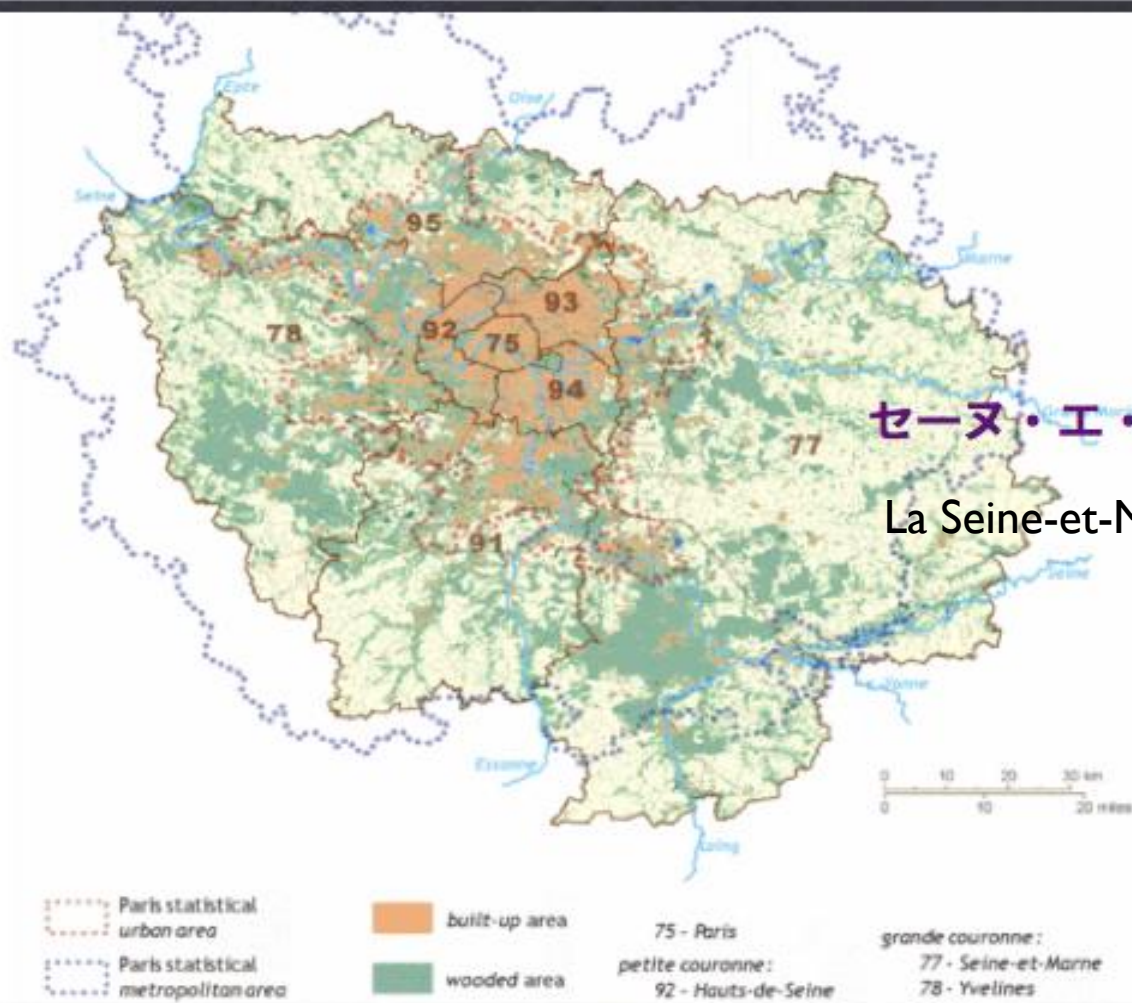
- ▶ 1980年代の地方分権化で、社会福祉に関する政策に関する権限が県に委譲された。
- ▶ 子どもの援助や保護に関する権限は、1986年1月6日法により、「子どもの社会的援助(l'Aide Sociale à l'Enfance)」の機能を県議会に与えた。
- ▶ 「子どもの社会的援助」の任務の1つは、専門的予防(prévention spécialisée)である。専門的予防は、子どもの保護の政策として県の学校政策、都市政策、経済と文化政策の中に位置づけられている。子どもの保護の分野における「予防」とは、社会的不適法、虐待、非行、危険な行動などの予防である。

→県議会に課された社会的介入の形態難民の地域社会への定住後は、国ではなく県レベルの施策が影響を及ぼすこととなったのである。





Photographing by Rreporter

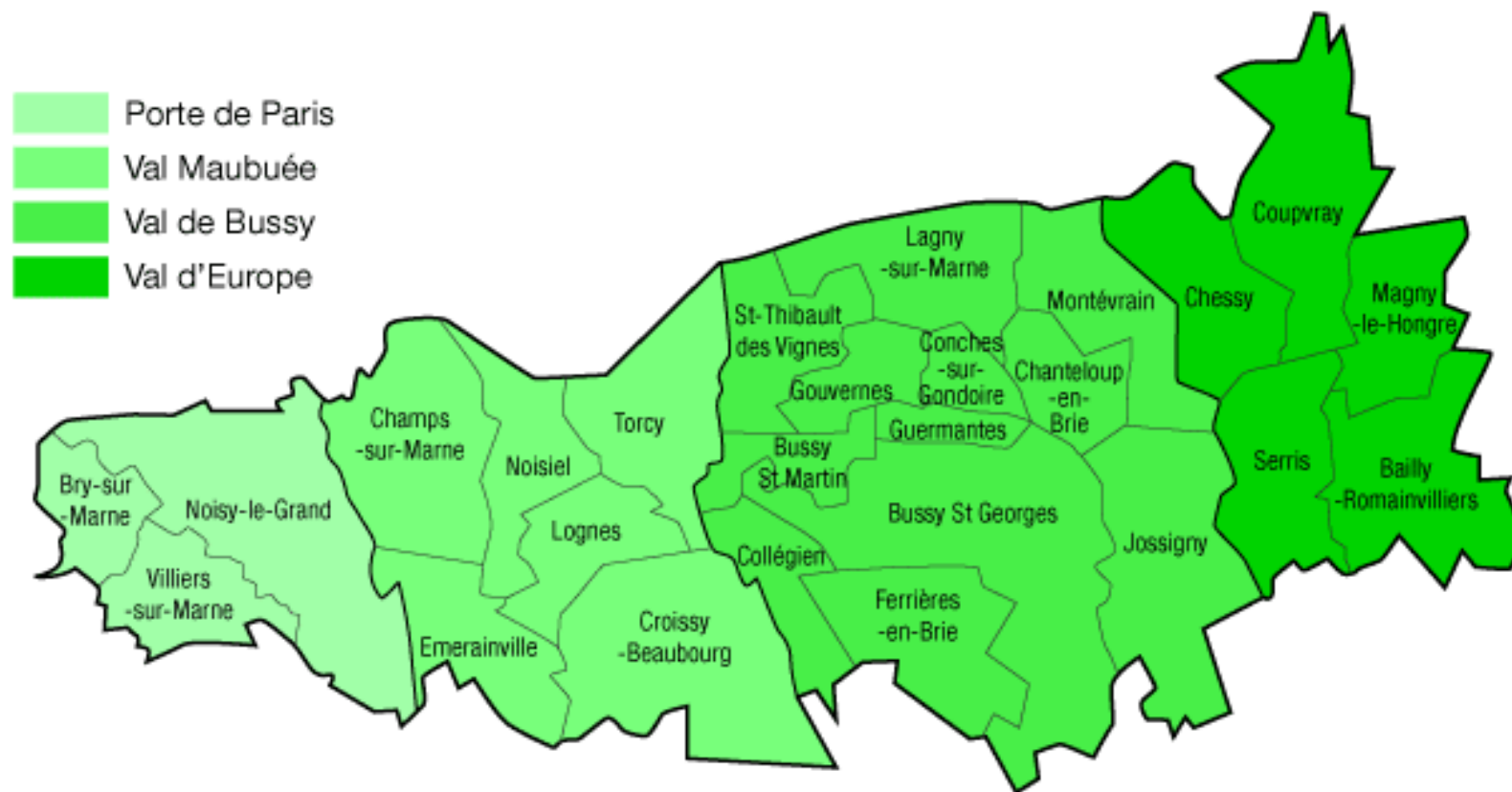


セーヌ・エ・マルヌ県

La Seine-et-Marne

セーヌ・エ・マルヌ県 Département de Seine-et-Marne

Carte de Marne-la-Vallée



Les alentours de Marne-la-Vallée





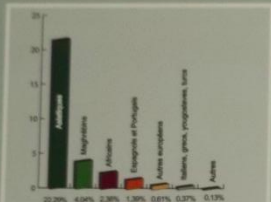




ローニュ市、アジア系大規模コミュニティ

Logn Qui sont les premiers ?

● Une population cosmopolite.



Origine	Pourcentage
Asiatiques	22,29%
Maghrébins	4,04%
Africains	2,38%
Espagnols et Portugais	1,39%
Autres européens	0,61%
Italiens, grecs, yougoslaves, turcs	0,37%
Autres	0,13%

Répartition de la population étrangère à la fin des années 80

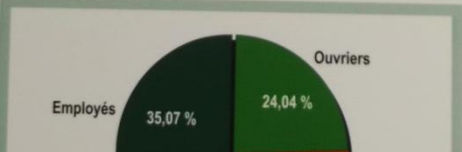


Classe de Cours Préparatoire (GS du Mandinet - 1989)

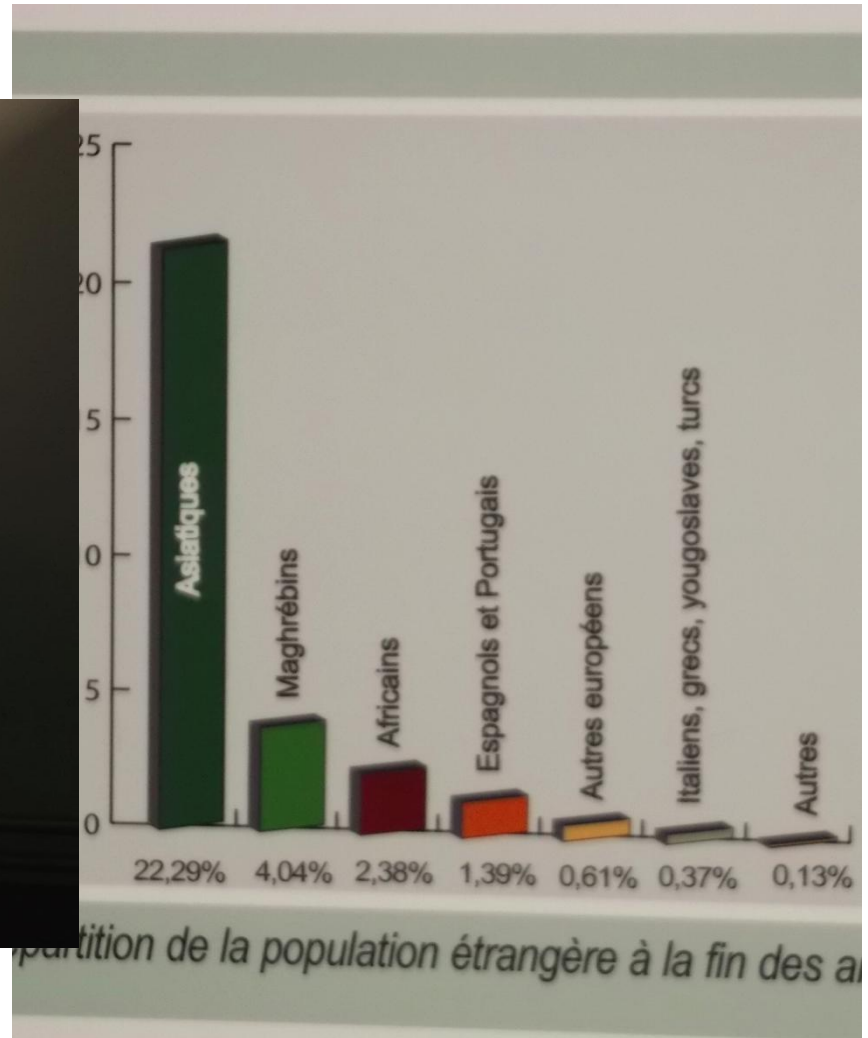
● Une majorité de familles souvent nombreuses

- Plus de 50% des ménages lognots sont composés d'au moins 4 personnes.
- Le pourcentage de foyers de 6 personnes et plus, accueillis à Lognes, est le plus élevé du Val de Seine (12,2%).

● Une répartition socio professionnelle marquée par une forte représentation des employés et des professions intermédiaires.



Catégorie	Pourcentage
Employés	35,07 %
Ouvriers	24,04 %



リモージュ市、Beaubreuil



Limoges - Beaubreuil

Le vendredi de 13h30 à 16h30









マルヌ・ラ・ヴァレの特徴

- ▶ マルヌ・ラ・ヴァレは、人口約28万、面積約15000平方キロメートルのパリ東部に位置するニュータウンである。その中でも外国人人口が13%を超え、アジア系人口の割合も高い地域である(Thomasset 2002:7)。
- ▶ 「ニュータウン」とは、1960年代後半から、都市計画の一環として造られた都市郊外の街で、郊外の組織化とパリ中心化を脱することが目指された。セーヌ・エ・マルヌ(Seine-et-Marne)県、セーヌ・サントニ県(Seine-Saint-Denis)、ヴァル・ド・マルヌ(Val-de-Marne)県の26のコミューンcommunes村を含む。行政的意図により、4つのセクター(ポルト・ド・パリPorte de Paris)、ヴァル モヴェ(Val Maubée:セーヌ・エ・マルヌ県のChamps-sur-Marne, Croissy-Beaubourg, émerainville, Lognes, Noisiel, Torcy)
- ▶ 旧インドシナ難民は、当初、CPH周辺の地域への定住が多かったが、1980年代以降は親族ネットワークを頼ってパリに移動するものが増えていく。一方で、1980年代後半になると、パリから郊外への転居も増加してゆく。彼らは、定住地として1970年代以降にフランスの都市計画の一環として取り組まれた「ニュータウン(Ville Nouvelle)地域を選択するようになる。

新しい町、新しい住民、承認されるメンバーシップ

- ▶ マルヌ・ラ・ヴァレの第2セクターであるVal Maubuéeは、1983年7月13日法で創設された新都市組合の2つである。人口は70,615人、そのうちの外国人の割合は4つのセクターの中で最も高い。
- ▶ ニュータウンの歴史の浅さは、伝統的な排他的コミュニティの存在が希薄で、地域に対するステレオタイプやイメージがない、無機質な場であったため、外国人や移民が住み易い場と認識された。
- ▶ ニュータウンの歴史と外国人や移民が転入してくる時期に大きなずれがなかったため、同じ住民として認知される。
- ▶ 外国人とフランス人という区分ではなく、「同じノワジエルの住民だ」（ヒアリング、パリ、ノワジエル市議会議員、カンボジア出身者、2009年9月16日）という言説も見られ、また、マルヌ・ラ・ヴァレに対してはサン・ド・ニなどの郊外と比べて退廃的なイメージがないため、肯定的なローカル・アイデンティティが見られた。
- ▶ ローニュ市長、ブッシー・サン・ジョルジュ市長のアジア系コミュニティとの積極的な関係形成。（参与観察、クメールボクシング大会に市長が出席、Bussy-Saint-George、2011年4月16日、ローニュ市長がラオスアソシエーションの代表になっている等）

リモージュの特徴

- ▶ リモージュ市は、人口約13万、面積約7745平方キロメートルのフランスの中部に位置するオート＝ヴィエンヌ圏の首府である。1895年にはフランス最初の労働団体であるC.G.T.がリモージュで結成された。1905年には労働者のストライキ、第二次世界大戦中にはレジスタンスの側で運動をしたため、左派の伝統を例え、「赤い街 (la ville rouge)」と形容されることもある。
- ▶ 1975年以来、D.D.A.S.の依頼により市内にCPHを設置し、インドシナ難民の受入れを制度化してきた。1975年当時は、常に約100人前後の東南アジア系難民が滞在していたという。。（ヒアリング、リモージュのCADA GATREMのディレクター、2010年1月6日）
- ▶ CPHを退所してリモージュに定住した難民は、Beaubreuil地区の集合団地に居を構えることとなった。ル・フー・コーによると（1995）、1980年から1990年の間に、カンボジア人4000人、ベトナム人3500人、ラオス人2500人が定住した。また、いくつかの統計を合わせた予測では、Beaubreuil地区の集合団地の1850戸の内、カンボジアが200家族、ベトナムが250家族、ラオスが100家族入居している。当時の人口が約1万であるから、地区住民のおよそ半数を東南アジア系人口が占めていることになる。また、ロックジョッフル（2009）によると、2002年、リモージュのアジア系家族の64%がこの地区に居住している

移植され、孤立したコミュニティと他者化される人々

- ▶ リモージュへの東南アジア系集団の移植は、大都市から隔離した地方へのCPHの設置と特殊な地域的条件によって引き起こされた、政府の受入れ政策の帰結(Huu, 1995:25)
- ▶ 難民は、母国では高い階層に属しておらず、フランスでは親族・知人ネットワークがなく、社会的文化的資本を保持していない。(ヒアリング、リモージュ、Beaubreuilのソーシャルワーカー、2009年9月18日)
- ▶ 社会的問題の多い団地地区への集住により、ソーシャルワーカーの支援の対象と位置づけられる。
- ▶ アソシエーションが県議会に申し出て、「東南アジア系」の子どもを対象とした施策を始め、「リスクを負っている」「脆弱で」「危険な」人々として集団化される。









Photographing by Rreporter

Ⅲ

単純化された表象と母語教室への参加を通じた
アイデンティティの多様化



地域社会における表象と言説

◆ 地域社会に存在する善意

「ノワジエル市長は、我々に母語教室を設立する機会を与えてくれた。彼らは私たちを支援してくれる。カンボジア難民を」(ヒアリング、マルヌ・ラ・ヴァレに居住するカンボジア難民二世、男性、ノワジエル、2005年6月)

◆ 肯定的なイメージ、静か、穏やか、騒音を立てない、問題を起こさない

「インドシナ難民は、私たちに難民の良いイメージを与えてくれる。彼らは、騒音を起こさずにフランスに上陸した」
(Jean-Jacques Lebond 記事, 1978年5月28日)

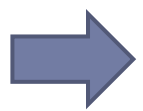
我々は、社会運動、労働運動、政治運動の不在を指摘できる。社会秩序を尊重する儒教のような彼らの国における社会的実践が、不在の原因であろう。(Khoa, 1988, p.83)

「私たちは、いかなる問題も起こしません。私たちは、穏やかで、いかなる異議申立も起こさないで、フランス社会に受け入れられました。(ヒアリング、ノワジエル市議会議員、カンボジア出身でフランス国籍に帰化、パリ、2009年9月)

肯定的イメージは存在するが、しかし...

◆ 静かにしていれば、我々は問題を抱えることはない。

「僕たちは、フランス社会に受入れられた。でも、実際、僕は仕事場の同僚との間で問題があった。ある日、僕の同僚が彼女のお財布をなくしたんだ。彼女は、僕が盗んだんではないかって僕を疑った。僕は、とても気分が悪かった。でも、とにかく怒らないようにって怒りを必死に押さえたよ。結局、僕はその仕事をこのせいで止めたけれど。」（ヒアリング、カンボジア難民第二世代、2011年8月）

 “肯定的なイメージ”が、彼らの権利のための異議申し立ての行為を押さえ込む。

文化活動

	13区クメール語教室
歴史	1981年、カンボジア難民の第一世代は、母語の保持と学校の教科学習のサポートのために、教室を設立した。当時は参加者の多数が難民の子供であった。しかし、2000年以降、主要な参加メンバーがフランス人になる。2010/2011は、登録者の80%がフランス人である。
運営	クラスは3レベルある。母語教室の先生は、カンボジアからの留学生と長くフランスに暮らす高齢のカンボジア女性。教室の確保においてパリ市からの支援はない。教会の敷地にある建物の一室を賃貸料を支払って借りている。運営費は、生徒の登録料によってまかなっている。イベントは、美術館ツアーなどが不定期である。
カンボジア出身の生徒(ヒアリング: 20代3人(男1人、女2人)、30代1人(男)の難民2世)	1人は大学生【映画専攻からビジネスに専攻を変えようとしている】、3人は社会人。社会人の職業は、2人がIT技術者、1人は会計事務所の秘書。クメール語教室に通う理由は、社会で働き始め、自分の民族的ルーツを再発見したいと思った。「自分はアジア系コミュニティの外にいるから、13区の方が通い易い」「家から一番近いから」。



ノワジェルメール語教室

歴史

教室は、1980年代初頭に子供達の母語喪失を危惧したカンボジア難民第一世代によって設立された。ノワジェル市長の許可のもと、市の幼稚園を土曜日の午前中無料で使用。補助金は、市から受けていない。

運営

クラスは、7レベルある。先生は、カンボジアで教育を受けた難民第一世代がほとんどで、1.5世の先生が1名、2世の先生が2名いる。全ての世代のカンボジア人が参加してるが、生徒の多くは小学生で、1.5世や2世の親が子供に母語を習得させるために通わせている。20代、30代の若者も数名通学しているが、母語習得や入学試験のために通学しているものもある。教室が、アジア系コミュニティのメンバーによって運営されてるため、母語習得だけでなく同国人同士の社交の場、交流の場となっている。日曜日午前中のため、生徒の出席率が悪い。定期的に先生同士の会議を開催し、情報交換や問題を共有している。ピクニックや母語の発表会を年度末に開催。カンボジアへの旅行を企画し、母国を知る機会を設けている。20代、30代の若者は、2010年以降男性のみ。

カンボジア出身の学生及び先生
(1.5世の男性2人、2世の男性3名)

1.5世の男性は、2名ともIT技術者。2世の男性は、2名がIT関係、1名が会社の事務職。アジア系コミュニティでの活動が活発で、そのネットワークで母語教室に通学し、運営にも関わるようになる。母語習得の目的は、「フランス人と変わらないが何か違う、社会的文化的に違うと感じている。18歳、19歳になってくると、自分の出身について知りたくなる。」家族がアジア系コミュニティに所属しており、毎週親族で集まったりコミュニティの行事があると参加している。





戦略としてのイメージの保持とエスニックな出自の補填を通じた「行動」

- ▶ 彼/彼女らに付与される良いイメージや肯定的な評判の保守
- ▶ 母語習得の過程を通じて彼/彼女らのアイデンティティを
探求、フランスと母国との違いについて、インターネット
で議論
- ▶ 母国のために行動を起こす。

(2005年4月17日クメールルージュ30年の追悼の更新を、2世の若者が企画し実施した。)
marche solennelle de plus de 600 personnes jusqu'à la Place du Trocadéro

結論

- ▶ 旧インドシナ難民の受入れに関する「例外的特徴」は、元宗主国のエコノミー・モラルの実践
- ▶ 地域レベルでの難民の階層化
- ▶ 「問題を起こさない」「静か」「穏やか」といったイメージによる社会関係の制約
- ▶ 母語教室への参加、母国への支援といったホームランドへ向けた行動による複数化するアイデンティティの担保



Photographing by Rreporter

Reference

Bancel, Nicolas et al., 2003, *La République coloniale—Essai sur une utopie—*, Bibliothèque Albin Michel Idées.

Fassin, Didier, 2008, «Compassion and Repression: The Moral Economy of Immigration Policies in France», (ed.) Inda, Jonathan Xavier & Rosaldo, Renato, *The Anthropology of Globalization. A Reader* (2nd edition), Blackwell Publishing, pp.212-234.

Fassin, Didier et Fassin, Eric (dr.), *De la Question Sociale à la Question Raciale?—Représenter la Société Française*, La Découverte.

Freedman, Jane, 2004, *Immigration and Insecurity in France*, Ashgate.

Fournier, Jean-Baptiste, Ivanoff, Jacques et Le Roux Pierre (éds), 1989, *Les Réfugiés d'Asie du Sud-Est et Leur Insertion en France*, SERIA.

Guillon, Michelle, 1995, «Les Asiatiques en France», *Migrants-Formation*, 101, juin.

Ida, Simon-Barouh, Phuoc, Saur Duong, 2004, *une Cambodgienne nommée Bonheur*, Harmattan.

---- 1989, «L'accueil des réfugiés d'Asie du Sud-Est à Julien, Brigitte, 1995

Julien, Brigitte, 1995, *L'insertion des Réfugiés de l'Ex-Indochine Française à Paris et en Ile-de-France de 1975 à 1995*. Thèse de Doctrat.

Kho, Le Huu, 1988, « L'Insertion Socio-Professionnelle des Jeunes issus de l'Immigration du Sud-Est Asiatique », Centre Universitaire de Recherche Sociologique d'Amien.

---- 1995, *Asiatiques en France: les expériences d'intégration locale*, pp.93-103, L'Harmattan.

Lacroze, Luc, 1994, *Dix-sept ans au service des réfugiés d'Indochine (1975-1992)*, le Comité national d'entraide franco-vietnamien, franco-cambodgien, franco-laotien.

- Meslin, Karine, 2006, «Accueil des boat people : une mobilisation atypique», in *Cambdge Soire, Plein*.
- Nann , Stéphanie, 2007, *Les Cambodgiens en France, entre l'image et la réalité, Migrations Société vol 19(109)*, pp.147-165.
- Noriel, Gerard, 1998, *Réfugiés et Sans-Papier. La République face au Droit d'Asile XX^e Siècle*, Hachette.
- Roquejoffre, Alain, 2009, *Une «communauté» asiatique en France : Le rôle des travailleurs sociaux dans l'acculturation*, L'Harmattan.
- 1990, «L'Insertion Sociale des Réfugiés de l'Asie du Sud-Est à Limoges Beaubreuil», dans *Hommes & Migrations*, 1134, Juillet, pp.39-48.
- 1990, «Les population du Sud-Est asiatique», dans *Hommes et Migrations*, no 1134, pp.39-48.
- Rodier, Claire, 1986, «Les enfants réfugiés d'Asie du Sut-Est: accueil et insertion. Pays-Bas, Belgique, France», dans *Revue Européenne des Migrations Internationales* Volume 2-N 3 Décembre
- Saada, Emmanuelle, 2007, *Les Enfants de la Colonie – Les métis de l'Empire français entre sujétion et citoyenneté*, La Découverte.
- Spire, Alexis, 2004, «les réfugiés, une main-d'oeuvre à part? Conditions de séjour et d'emploi, France, 1945-1975», in *Revue européenne des migrations internationales*, vol.20- n--°2, pp.23-38.
- Thao, Trinh Van, 1995, *L'école française en Indochine*, KARTHALA:
- Weil, Patrick, 1995, *La France et ses étrangers. L'aventure d'une politique de l'immigration de 1938 a nos jours*, Paris, Gallimard.
- Wijers, G. D. M., 2011, *The Reception of Cambodian Refugees in France*, in *Journal of Refugee Studies*, 24(2), pp.239-255.

1898: LDH
1924: SSAE
1939: Cimade
1946: Secours catholique
1971 : FTDA